

廣 報

東京大学理学部

(題字は柴田雄次名誉教授)

目 次

ある山崩しゲームの話

米田 信 夫… 3

Wine and Cheese

Seminar 猪木 慶 治… 5

地球化学と地震予知

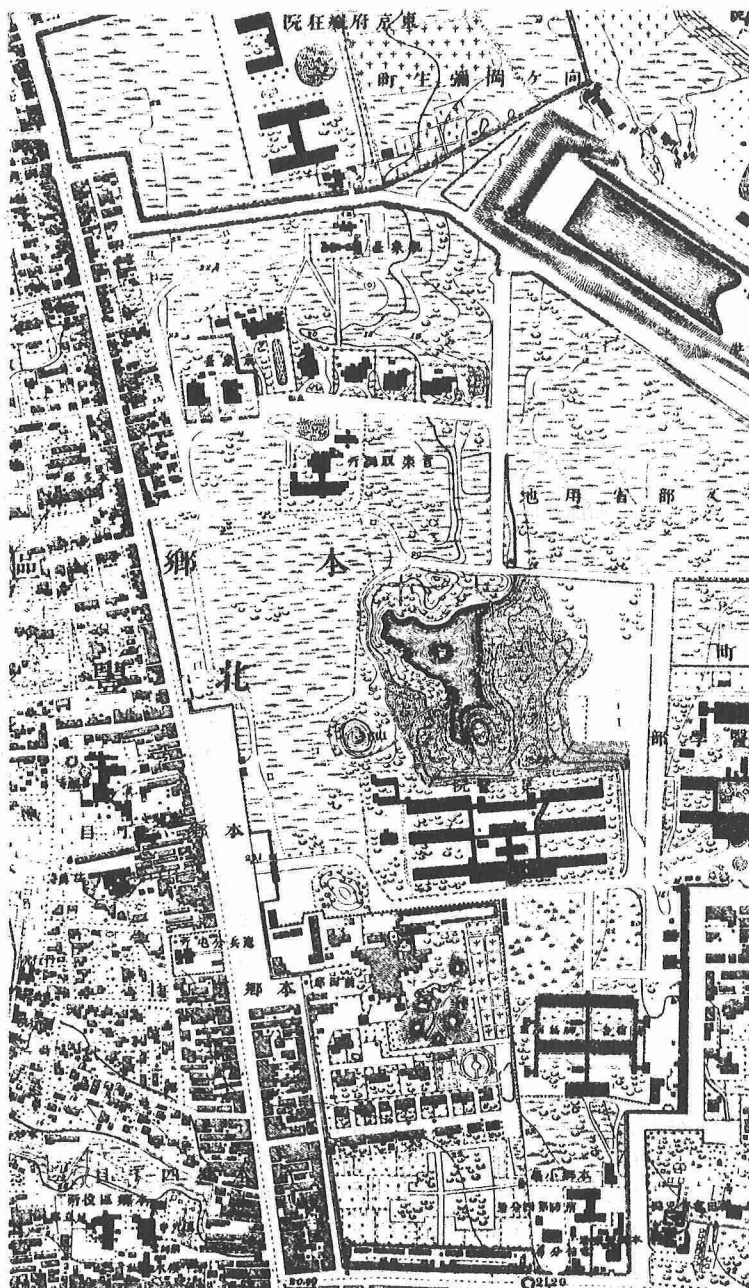
脇 田 宏… 8

岩石学から化学地質学へ

飯 山 敏 道… 11

<学部消息>

14~15



五千分の一東京図 明治5年
以来おこなわれてきた測量の成
果をまとめた図で、皇居を中心
として、東西・南北各7.5 km、
当時の市街化地域のほぼ全域が
カバーされている。図にみられ
るように、家屋は一戸一戸まで
示されている。芸大の前身、音
楽取調所は、現在の法文経の建
物の付近にあったようだ。

(S)

三四郎池について

表紙にたまたま三四郎池がでていることと、またちようど浚渫が話題になっていることによって、三四郎池の存在があらためて意識にのぼった。その成因について識者の寄稿をあおごうと思ったが、どうも調査は行なわれていないらしく、正確な記事にはなりにくいということなので、電話でうかがった知識と編集委員(S)のおぼろげな記憶をつなぎ合わせて、おおよその考えを紹介しておく。

出口のない池の形からみて、人工的な池であることには、ほぼまちがいない。もっと古い地図をたどって行けばこれは確かめられよう。

したがって、水が涸れないということだけが成因上の問題で、それは、おそらく、東京層と呼ばれる難透性の粘土層が池の底にあるためと考えられる。この粘土層は、海底の堆積物で、おそらく海面が今よりも高かった10数万年前のリスーヴェルム間氷期の海に堆積したもので(確定はされていない)広く分布し、その延長がお茶の水駅のホームからみえる、今は花園になっている神田川の斜面に露出している。その粘土層の上に6万年前の堆積とされている本郷砂層があって、

滞水層をなしているらしい。その上は、東京浮石層、武蔵野ローム、立川ロームがあり、いずれも透水性が良いので、降った雨は静かに浸透して、本郷砂層のなかに貯わえられ涸れることがない。この砂層も、神田川の斜面に露出しているはずで、そこから湧き出る泉で生活する放浪者は、戦後、「自由学校」という小説の主人公になった。

三四郎池に関する記事がもしあるとすれば、地理学教室初代主任、山崎直方先生が、「理学会誌」か、「震災予防調査会報告」のはじめの方に書いておられるのではないかと、名誉教授多田文男先生から電話で教えていただいたが、私の専門をややはずれることなので、調べてみる余裕がなく、御紹介しておくのにとどめたい。

なお、もし浚渫をしないとどうなるかという、おそらく、本郷砂層の目がつまり池の部分だけ地下水面が高くなって地層中で四方へ流れ下り、水深が減って沼となり、魚が死滅し、ポーフラがわくようになるのだろうと思う。経費はかかっても止むを得ないのだから。(S)